

菩薩精神

学長 藤原了然

大学が学問の場であることはいうまでもない。そして画龍点睛というか、大学をして真に学問の場としての実をあげしむるものは、大学における教育するものと教育をうけるものとの間における心の通いあいであるといつていいであろう。特に近ごろのように、人間形成とか生涯教育とかということが、声を大にして叫ばれているのを見ると、今更のように、教育の世界における心の問題の重大さが痛感される。

この意味において、佛教もまた人間教育に関する大きな役割を果たしていることはいうまでもない。このことの顕著な一例をあげると、平安期における真の日本的佛教の大成者である伝教大師最澄は（七六二—八二二）は、国家有為の人材養成のための学則ともいうべき『山家学生式』（さんげがくしようしき）の中で、有為の人材すなわち国宝の養成を目ざして、

「国宝とは何物ぞ。宝とは道心なり。道心ある人を名づけて国宝となす。ゆえに、古人の言わく、径寸十枚国宝にあらず。一隅を照らす、すなわちこれ国宝なり。」

また言わく、よく言うて行なうこと能わざるは国の師なり。よく行うて言うこと能わざるは国の用

なり。よく行いよく言うは国の宝なり。

三品の内、ただ言うこと能わず、行うこと能わざるを国の賦となす。

すなわち、道心ある佛子を西には菩薩と称し、東には君子と号す。悪事を己れに向け、好事を他に与え、己れを忘れて他を利するは、慈悲の極なり」

といっている。まことは深遠の講想というべきか。ここである道心とは、別語して、求道心、菩提心、菩薩精神ともいわれているものであるが、さらにいえば、自他平等の見地に立つての眞実の人間探究への至高純粹な情熱といつていいであろう。そして慈悲とは、この道心の具体的顯現または隨處爲主的躍動と称されてよい。いずれにしても、この道心とか慈悲といわれるものは、まことの佛教の骨目をなすものであり、また眞実の人間形成の精神的風光を物語るものであることが覺知さるべきであらう。

經典の到るところに、「無盡の大悲」ということが強調され、また「菩薩代受苦―菩薩は自らの大悲の要請もだしがたく、頼まれもしないのに一切の迷える人人の身代りとなつてもろもろの苦を受ける」といつているのに到つては、菩薩精神の面目躍如たるものがあるといえよう。

佛教大学の建学の精神たる佛教精神とは、まさにこの菩薩精神を意味する。教育するものと教育をうけるものとが、その共通的基盤たる本有平等の菩薩精神に立脚して、願共諸衆生（手に手をとつて）心の通つた慈悲行としての教育と研究が行われるところに眞実の人間（菩薩）の誕生が約束され、ここにこそ佛教大学の存立の意義と志願とが確認さるべきであらう。